

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	非人間化の枠組みを用いた関係依存メカニズムの解明
Author(s)	黄, 瑤
Citation	広島大学マネジメント研究 , 25 : 28 - 28
Issue Date	2024-03-26
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055770
Right	Copyright (c) 2024 by Author
Relation	



非人間化の枠組みを用いた関係依存メカニズムの解明

黄 瑤

1. 研究の背景と目的

非人間化とは、ある個人が他者に対して人間らしさ、または根本的な特性を否定することと定義される。これまでの研究では、非人間化は主に集団や組織の関与する文脈で発生することが示されてきた。しかし、非人間化は日常的な虐待行為にも関連しており、人間関係にも適用される可能性がある (Bastian, 2011)。Pizzirani et.al (2019) によると、非人間化された対象者は、その影響を受けるほど、自己評価が低下し、親密な関係の中でネガティブな言動が増える傾向がある。

そこで、本研究では、非人間化が対象者の心身の健康や親密な関係の継続性にどのような影響を与えるのか、また非人間化の発生過程や機能について明らかにし、非人間化の理論を親密な関係に適用するための実証的研究を行い、関係の依存の解明について新たなプロセスを探求する。

2. 先行研究レビュー

Haslam (2006) は、対象者を理性、羞恥心、教養の欠如した者と見なすことを人間の独自性の否定と定義し、対象者を感情的に冷淡で、自律性が欠如していると見なすことを人間性の否定と定義した。Pizzirani らそれを踏まえて、4 因子の非人間化モデル (未熟 immature, 粗悪 unrefined, 利用 exploitable, 無感情 emotionless) を提案した (Pizzirani & Karantzas, 2019; Pizzirani et al., 2019)。これらの非人間化の下位因子は、受け手の心身の健康に悪影響を及ぼす可能性があり、親密な関係の質や継続性にも負の影響をもたらす可能性がある。実際、非人間化を経験すると、対象者は相手から社会的排除、敵意、軽蔑、批判などネガティブな扱いを受けやすくなるとされている (Haslam, 2006; Haslam, 2014; Bastian and Haslam, 2010; Bastian and Haslam, 2011; Karantzas et.al, 2022)。

しかし、非人間化されることは必ずしも悪い結果を招くばかりではないかもしれない。James (2001) は、親密な関係における「親密さ」の概念を分析した結果、脆弱性の表出は親密な関係の発展に積極的な役割を果たしていると述べる。このことから、4 因子モデルの中の未熟は、対象者の相手に対する自己開示を促進することで、逆にパートナーとの絆を強化するかもしれない。

また、非人間化された対象者は自己評価や自尊心を低下させることで、過大利得状態であるように感じる可能性がある。

3. 仮説

仮説 1 「親密な関係における非人間化を 4 因子で捉えた場合、それぞれの非人間化が進むほど、対象者の関係に対する満足度とコミットメントは低下するだろう」

仮説 2 「親密な関係における非人間化を 4 因子で捉えた場合、それぞれの面で非人間化されるほど、対象者の抑うつ程度は上がるだろう」

仮説 3 「4 因子のうち、未熟という点で非人間化されるほど、対象者の関係に対する満足度、コミットメントが上昇するだろう」

仮説 4 「対象者が非人間化されるほど、過大利得状態になりやすいだろう」

4. 調査方法

親密な関係を持つ、年齢 20 代から 50 代の人を対象として 2 時点のパネル調査を実施した。調査内容は、参加者の非人間化程度、DV 被害程度、親密な関係の質 (コミットメントと満足度)、抑うつ程度、自身の平衡状態について測定した。平衡状態の項目は Time2 の調査だけ測定し、それ以外は 2 時点で測定した。

分析について、非人間化、DV 被害、コミットメントと満足度、抑うつの変化量を算出した。Time2 のコミットメント、満足度と抑うつ得点をそれぞれ従属変数にして、対応する Time1 の変数 (コミットメント、満足度、抑うつ) と非人間化や DV 被害の変化量を独立変数にして重回帰分析を行った。

また、平衡状態を従属変数にして、Time2 の非人間化得点を独立変数にして、2 次曲線を推定した。

5. 結果

非人間化の粗悪、利用因子と満足度、コミットメントの間に有意な負の効果が見られ、仮説 1 は部分的に支持された。未熟因子と満足度、コミットメントの間に有意な正の効果が見られ、仮説 3 は支持された。どの因子も抑うつ間に有意な効果が見られず、仮説 2 は支持されなかった。平衡状態について、粗悪因子と無感情因子の間に有意な曲線的な効果が見られた。2 次曲線の形状から、粗悪と利用因子において、非人間化されるほど、平衡状態の得点が高くなった。よって、仮説 4 は部分的に支持された。

6. 考察

本研究では、未熟因子と親密な関係における満足度やコミットメントの間に有意な正の効果が見られたことから、非人間化の 4 因子モデルを用いて研究する意義を示すことができた。これまで、非人間化は個人にとって有害だと考えられてきたが (Bastian, 2011; Pizzirani and Karantzas, 2019; Bastian, 2019)、4 因子に分けて捉えることで、親密な関係の継続にとって必ずしも有害とは限らない可能性を示した。Bastian (2019) が指摘したように、時に非人間化は関係依存を強めることもあるといえるだろう。今後は、各因子の効果プロセスをさらに明確にする必要がある。